

自由直接話法と自由間接話法の周辺テキスト

顧 那

キーワード 自由直接話法、自由間接話法、周辺テキスト

0. はじめに

鎌田（2000：8）が「いかなる言語表現もそれを取り巻くコンテキストから分離しては存在しない」と説いているように、自由直接話法と自由間接話法もまたコンテキストと密接な関係を持つ言語表現である。川島（1975：17）は、ドイツ語における体験話法の実例を挙げながら、¹テキストとコンテキストは体験話法が成立する基礎的要件だとしている。日本語の自由間接話法に関する研究は、自由間接話法の統語的特徴を考察するもの、具体的な作家や作品における自由間接話法についての分析、翻訳を利用した対照言語学的な考察、自由間接話法の文体的機能を明らかにしようとするものなど、さまざまな角度から行われてきた。それにもかかわらず、自由間接話法を取り巻く周辺テキストについて論及している研究は少ない。

本稿は、日本語における自由直接話法と自由間接話法を取り巻く周辺テキストについて考察するものである。²先行研究における問題点を指摘したうえで、自由直接話法と自由間接話法の周辺にどのような種類のテキストが現れやすいか、そして、周辺テキストが自由直接話法と自由間接話法の理解にいかなる役割を果たしているかを明らかにする。

1. 先行研究の概観およびその問題点

1.1 先行研究の概観

自由間接話法をコンテキストとの相互関係において理解するべきだと唱えている研究として、保坂（1981）、保坂・鈴木（1993）、野村（2000）がある。

保坂（1981:107）は、西欧語の場合と同様に、日本語の自由間接話法の部分にも思考（発言）者表示部がそえられておらず、「その前後のコンテキストの相互関係で、その部分が思考の再現であるとの指示がなんらかの言語形式によっ

て明示的になされていなければならぬ」と述べている。また、保坂・鈴木(1993: 25)は、保坂(1981)を踏まえて、自由間接話法が成立するための要件の一つとして、「当該の部分テキストが登場人物の思考・発言であると、読者が読みとれる識別標識が、その部分テキストの内かその前後に必ずおかれている」ことを挙げている。

野村(2000: 295-296)は、「描出表現とよぶ範疇は、体験話法・自由間接話法・描出話法などに比して広範である」としたうえで、描出表現に対する理解は当該表現の形態上の特徴だけでなく、それをふくむ部分テキストとの関係性によって決まると述べている。

1. 2 先行研究の問題点

以上の先行研究では、自由間接話法を取り巻く周辺テキストが話法を理解するうえで重要であることが指摘されているにもかかわらず、周辺テキストについての具体的な考察があまり見られない。また、用例の分析においては周辺テキストを考慮する姿勢を見せながら、自由間接話法の内部における文法特徴に、より大きな関心が寄せられている。つまり、自由直接話法と自由間接話法の周辺テキストについての考察はまだ不十分であると言えよう。

2. 周辺テキストの種類と出現頻度

自由直接話法と自由間接話法には、その特徴として、作中人物の思考・発話内容を伝える部分に作中人物のテキストが入っている。³この意味において、それらは語り手のテキストであるその周辺テキストとは性質を異にしている。本節では、小説の中で自由直接話法と自由間接話法の前後にどのような種類のテキストが存在するかを明らかにしたい。

2. 1 用例の収集方法

用例は、三人称小説5篇と一人称小説5篇から収集したものである。小説の選択と例文の収集にあたって次の点に配慮した。

1. これまで取り上げられることの少なかった90年代以降に出版された文学作品を利用した。
2. 自由直接話法と自由間接話法による発話再現の例が比較的少ないので、三人称小説と一人称小説から思考再現の例が同程度になるように作品を選択した。

3. 用例数の偏りを避けるため、短編小説からは自由直接話法と自由間接話法で再現された作中人物の思考・発話の例をすべて抽出し、長編小説からは最初の約3万字のテキストから用例を抽出した。⁴
各作品から収集した用例の数を表1に示す。

表1 用例数

	タイトル	思考の再現	発話の再現	合計
三人称小説	『発見者』	12	0	12
	『透光の樹』※	19	1	20
	『鉄道員』	15	2	17
	『うらぼんえ』	42	1	43
	『宵の春』	14	0	14
	合計	102	4	106
一人称小説	『インストール』※	36	3	39
	『伽羅』	18	0	18
	『さやさや』	11	64	75
	『刺繍する少女』	20	1	21
	『晩年の子供』	18	2	20
	合計	103	70	173

2.2 周辺テキストの種類

ここでは、自由直接話法と自由間接話法で再現された作中人物の思考・発話部分の前後に現れるテキストを分類したうえで、その出現頻度を示す。

2.2.1 分類

自由直接話法と自由間接話法の周辺テキストは、下の表に示すように、知覚に関する表現、内面に関する表現、思考主・発話主の行動に関する表現、その他の表現と大きく4分類できる。

表2 周辺テキストの種類

種 類	内 容
知覚に関する表現	周囲の様子を表す表現 その他の作中人物の発話や行動を表す表現 知覚を意味する表現
内面に関する表現	思考主・発話主の思考や心理状態、回想、想像などを表す表現
思考主・発話主の行動に関する表現	思考主・発話主の発話や行動を表す表現
その他の表現	語り手による状況の説明や評論 周辺テキストと意味のつながりがない場合

以下、これら4種類のそれぞれを、事例に即して見てみよう。

2. 2. 2 知覚に関する表現

周囲の様子および思考主・発話主以外の作中人物の発話や行動を表す表現は、単に語り手による描写のようにとらえられがちであるが、これらの表現が自由直接話法と自由間接話法の周辺に置かれると、作中人物によって知覚されたことの意味合いが強くなる。このことを、以下の例で確認する。⁵

- (1) ①彼の目の前の傭は口髭を生やし、自らの思念に深く沈んでいるような目をした武士だった。②右手は何かを握ってでもいるように前に差し出し、左手は鎧を着た胴の腰骨のところに当てている。③彼は貴人の護衛に立っていたのだろうか。あるいは彼が護ろうとしていたのは特定の貴人ではなく、当時の体制の価値、あるいは価値の永遠性とでも呼ぶべきものだったのか。④李は傭に問い掛けるような目を向けて葉巻を胸の奥まで吸込んだ。(『発見者』p.31)

(1)の③は、作中人物の「李」の思考表出である。この部分に先行する①と②は、「李」の目の前にある兵馬傭についての描写である。工藤(1995:199)によれば、出来事の提示部分に用いられる「ている」形式は、「作中人物の知覚体験性が前面化する」という。(1)の場合、「当てている」という「李」の知覚を意味する表現から、また兵馬傭についての「李」の思考内容からも分かるように、②は「李」が今視覚でとらえていることである。

さて次は、思考主以外の作中人物の発話が先行する場合である。

- (2)①「あんたはこれをすぐ直せたの？」

②「はい。直したっていうかケーブルつなげたら普通にすぐ起動しました

よ。]

③ということはつまり、私のやり方がまずかっただけで、機械は少しも壊れてなどいなかったわけだ、ただ死んだふりをしていた。そして賢き子供に拾われて見事この押入れでデビューを果たした。おじいちゃん、やり手である。④強い光を放つ画面に触れてみたら、指の先で、パツと静電気のはじける音がした。(['イン』 p.47)

(2)の②は作中人物「青木くん」の発話であるが、それに続く③は「青木くん」の発話を聴覚でとらえた「私」が考えたことである。

以上の2例は、思考・発話の再現部分の前に周囲の様子や、思考主・発話主以外の作中人物の発話や行動を表す表現が現れている例である。これらの表現は、思考主・発話主の思考・発話行為のきっかけとなっている。つまり、思考主・発話主がそれらを知覚したうえで、自らの思考・発話行為が惹起されているのである。

しかし、知覚に関するこれらの表現が思考・発話の再現部分の後に現れると、それはむしろ作中人物の思考・発話行為の終了を意味するようになる。次はそういう例である。

(3) 言い終えたとたん、次の言葉が溢れてきた。二十五年前、ここに来た当時は、そうじゃなかったんだが。

遠くの高いものを見ていた、と彼は思った。よく透んだ、自分の奥から引き出された真実、それさえあれば、世の中の誰であっても、納得させ感動させることが出来る、要はその真実を、発見し、護り抜く力があるかどうかだ。力瘤が入ってたなあ、何とまあ、真実だよ。

「寒くありません？」(['透光』 p.40)

(3)の場合、点線で示された作中人物の「郷」の内面表出は、別の作中人物「千桐」の発話によって終了を余儀なくされた形になっている。このような場合、思考主がその他の作中人物の発話や行動に知覚を働かせることによって自らの思考を終了させることになる。

2. 2. 3 内面に関する表現

内面に関する表現には、思考主・発話主の思考や心理状態、回想、想像などを表す表現が含まれる。たとえば次のようにである。

(4) さし当たって、発狂するということを遠ざけなければならない。私は、そう思いついた。(['晩年』 p.18)

(5) 邸の喧噪に、ちえ子はおじけづいた。いったいどう言いわけをすればいいのだろう。申し訳ありません、身寄りが無いもので……そんなことを、

家族ぐるみでやってきた夫の親類に、いちいち言っ
て回らねばならないの
だろうか。（『うら』 p.208）

(4)において、点線部分が「私」の思考であることを示しているのは、後続する周辺テキストに用いられている「思いついた」という表現である。一方(5)では、(4)のように思考が直接的に表現されていないが、作中人物の心理状態を表す「おじけづく」という表現が思考表出の部分の近くに置かれている。

この種の表現は、語り手による作中人物の内面についての描写であり、「思った」や「考えた」の他に、「思い出した」、「想像した」、「驚いた」、「後悔した」、「腹立たしい」、「悔しい」などさまざまな表現が観察される。そして、この種の表現は、作中人物の内面に移入する合図となっている場合が多い。

2. 2. 4 思考主・発話主の行動に関する表現

思考主・発話主の行動や発話を表す表現がこの類に入る。そして、この類は、作中人物の思考・発話部分の前にも後にも現れるが、話法の部分との関係を考えれば、前に現れた場合と後に現れた場合とではいくぶん意味が異なるように思われる。このことを、次の2例で確認する。

(6) 「十二年前です」

お盆ごと差し出したものの、やはり梅干は恥しい。でも、どうせ手をつけるはずないわ。

しかし郷は、頂きますと言って、待っていたように赤い実を口に放りこんだ。（『透光』 p.29）

(7) 私は大きく口を開けてまた反論しようとしたが、そのときふっとこのおじいちゃんのコンピューターが昔のように快活にキューインキューイン起動している姿が目の前に浮かんだので、あ、それはめでたい、「本当に直せるのなら差し上げます。」（『イン』 pp.21-22）

(6)では、作中人物「千桐」の内面表出部分の前に「千桐」の行動に関する表現が来ている。しかし点線の部分は、「お盆を差し出す」という動作が完了した後に「千桐」が思ったことと見なすよりも、動作と思考行為が同時に行われたと見なすほうが妥当のように思われる。一方(7)では、思考主の発話や行動がその内面表出部分の後に現れている。このような場合、思考主が考えた末に下した決断をその発話や行動に反映させるという意味合いが強くなる。

2. 2. 5 その他の表現

作中人物の思考・発話の再現部分の近くに、語り手による評論や状況の説明が現れることもある。次はそのような例である。

(8)外からは、さしあたって文句をつけるところのない容姿や物腰にもかかわらず、千桐は夕暮になると、一度は自分の不幸を呪い、この呪いが十二歳の娘、眉に乗り移らないように強張った笑顔をつくっては、自分に向かって呟くのがあった。離婚して眉を連れて父の家に戻ってきたのは、わたしの弱さ、わたしの強さ、だからきつと、わたしにもこの窮地から抜け出す方法が見つかるはず、神様仏様、その方法を教えてください。

神様仏様が出てくるあたり、呪いといってもどこかのんびりしたところがある。(『透光』 p.6)

上の(8)における点線部分は、作中人物の「千桐」による思考・発話の再現部分である。それに後続する文は、その意味から、語り手による評論として解釈するのが自然であろう。

なお、作中人物の思考・発話の再現部分の前や後に章節の区切りを示す空行が入る場合、あるいは思考・発話の再現部分とその周辺テキストと意味的なつながりを持たない場合などもあるが、そのような例も「その他の表現」と見なした。

2.3 前後に見られる差異

前節での分類基準に基づき、作中人物の思考・発話の再現部分の前と後に出現したテキストの種類を小説ごと集計した結果を、表3と表4に示す。表3は

表3 周辺テキストの種類別出現頻度（思考再現の場合）

		「 発見 」	「 透光 」	「 鉄道 」	「 うら 」	「 宵の 」	「 イン 」	「 伽羅 」	「 さや 」	「 刺繍 」	「 晩年 」	合計 (%)
前	知覚に関する表現	3	2	7	22	6	25	11	8	16	5	105 (51.2%)
	内面に関する表現	3	14	6	13	5	8	5	3	3	12	72 (35.1%)
	思考主の行動	1	3	1	5	3	3	1		1	1	19 (9.3%)
	その他	5		1	2			1				9 (4.4%)
	合計	12	19	15	42	14	36	18	11	20	18	205
後	知覚に関する表現	1	4	3	13	4	9	10	5	8	1	58 (28.3%)
	内面に関する表現	4	5	9	9	6	8	4	4	8	12	69 (33.7%)
	思考主の行動	3	5	3	17	2	15	3	2	3	4	57 (27.8%)
	その他	4	5		3	2	4	1		1	1	21 (10.2%)
	合計	12	19	15	42	14	36	18	11	20	18	205

表4 周辺テキストの種類別出現頻度（発話再現の場合）

		『 発見 』	『 透光 』	『 鉄道 』	『 うら 』	『 宵の 』	『 イン 』	『 伽羅 』	『 さや 』	『 刺繡 』	『 晩年 』	合計 (%)
前	知覚に関する表現					1		38				39 (52.7%)
	内面に関する表現					2		10		1		13 (17.6%)
	発話主の行動	1	2	1					12	1		17 (23.0%)
	その他								4	1		5 (6.7%)
	合計	0	1	2	1	0	3	0	64	1	2	74
後	知覚に関する表現			1			2		22			25 (33.8%)
	内面に関する表現				1		1		4			6 (8.1%)
	発話主の行動			1					38	1	2	42 (56.7%)
	その他		1									1 (1.4%)
	合計	0	1	2	1	0	3	0	64	1	2	74

思考の再現である自由直接話法と自由間接話法についての出現頻度であり、表4は発話再現についての出現頻度である。作中人物の発話を再現する自由直接話法と自由間接話法の例は比較的少ないが、『さや』のように、自由直接話法で作中人物の発話を再現することを特徴としている小説も見られる。

表3と表4から分かるように、4種類の周辺テキストは作中人物の思考・発話の再現部分の前にも後にも現れるが、その出現頻度に違いが見られる。思考再現の場合、それに先行するテキストに圧倒的に多く用いられるのは、知覚に関する表現と内面に関する表現である。これは、そのような表現を使用するほうが、作中人物の内面への移入がよりスムーズであるからであろう。

内面に関する表現は、思考・発話の再現部分の前後における出現頻度が同程度であるのに対し、知覚に関する表現の出現頻度は後のテキストにおいて減少し、逆に思考主の行動に関する表現が増加するのが目立つ。これは、思考主の行動に関する表現が語り手の外的視点による表現であるので、それを思考・発話の再現部分の後に用いると、思考・発話再現の終了を明白に示すことができるからであろう。

なお付言しておく、作中人物の思考・発話の再現部分の前後に見られるテキストの種類別出現頻度の差異は、顧（2003）で触れたように、三人称童話においても同様な傾向が見られる。

2. 4 思考再現の場合と発話再現の場合に見られる差異

表4と表3を比較してみれば、発話の再現部分の前後には内面に関する表現が思考再現の場合より少ないことが分かる。自由直接話法の形式で表現されているのが作中人物の会話であることを考えると、発話再現部分の前後に発話主の内面に関する表現より発話主以外の作中人物の発話が多いのは当然であろう。なお次のように、発話再現部分の前後には、当該部分が発話であることを示す表現が多く観察されている。

(9) 歩きましょうか。なにもないですね。言いながら、メザキさんは店に来たときと同じように、腰を揺らして半歩先をゆく。(『さや』p.10)

このような表現を「発話主の行動」に分類したため、発話主の行動に関する表現は、思考再現の場合における思考主の行動に関する表現よりはるかに高いパーセンテージになっている。

3. 周辺テキストの役割

次の例は、三人称小説の地の文から取った一文である。

(10)私の問題点は、子供は大人より、遅れてスタートを切ったのだと思えないところにあるのよ。(『トラ』p.23)

周辺テキストから切り離されたこの一文を見るだけでは、この文が伝えているのが「私」という人物の思考であるか発話であるか分からない。そして、この文を発しているのがどの作中人物かも分からなければ、この文が再現しているのが作中人物の思考・発話内容の全体であるのか、その一部にすぎないのかも分からない。

これらの不明な点をはっきりさせるには、(10)を取り巻く周辺テキストに頼るしかないであろう。本節では、自由直接話法と自由間接話法を理解するのに周辺テキストが果たす役割について考察する。

3. 1 思考表出か発話再現かを示す

次は、前掲(10)をその周辺テキストとともに示したものである。

(11) ①ココは、慌てて口をつぐんだ。②どうして、私って、こんなに子供相手が下手なのかしら。私の問題点は、子供は大人より、遅れてスタートを切ったのだと思えないところにあるのよ。だから、子供に対して怒りを感じることもあれば、それについて悩むこともある。③ココは、ジェフリーを見て、思う。④本当は、こんなにも、小さくて、可愛らしい生き物なの

に。⑤そう思うと、やさしい気持ちになり、大人気ない自分の態度を後悔するのだ。(『トラ』 p.23)

①における「口をつぐむ」という動作は、後続する②が発話でありえないことを意味している。さらに、③と⑤における思考を表す動詞の「思う」は、前掲⑩を含む点線部分が作中人物の思考再現であることをより明瞭に示している。

次は発話の再現であることを示す例である。

(2) ①デザートと一緒に、大家はマンションの図面をテーブルに上げたのだった。②ねえ、ちいちゃん、と物言いは昔なじみのやさしさだったが、話は露骨だった。③七階のワンルームに住むか、それとも百万円の立ち退き料を受け取るか。(『うら』 p.202)

(2)における点線の部分が作中人物の「大家」の発話の要約として読み取れるのは、この部分が、先行する②における「話」という部分によって示唆されており、それと「露骨」との意味的な整合性も高いからであろう。

3. 2 思考主・発話主を示す

前掲⑪のように、思考主・発話主を示す語が思考・発話の再現部分の周辺に置かれていることが多いが、次のように広範囲の周辺テキストを考慮しないと発話主が確定できない例もある。

(3) ①海辺の駅か。それならここは海辺かな。でも潮の匂いがしないですね。②メザキさんが握る手に少しだけ力をこめた。(『さや』 p.14)

(3)における点線の部分は、それに後続する②の主語による発話として解釈するのが自然であろうが、(3)の場合、②の主語は二通りの可能性がある。このことを、次の作例で確認してみよう。

(4) 海辺の駅か。それならここは海辺かな。でも潮の匂いがしないですね。(そう言って)メザキさんが握る手に少しだけ力をこめた。

(5) 海辺の駅か。それならここは海辺かな。でも潮の匂いがしないですね。(私はそう言って)メザキさんが握る手に少しだけ力をこめた。

これらの作例からも分かるように、(3)の点線部分は、周辺テキストが曖昧なため、発話主が作中人物の「私」とも「メザキさん」とも見なしうる。発話主を確定するには、やや離れてはいるが、(3)に先行する複数の段落に散らばっている、(3)の点線部分の発話と意味的なつながりを持ついくつかの文に頼らなければならない。下に、それらの文を抽出する。

(6)メザキさん、ここどこなんですか。ここね。ほくもさっきから考えてるんですよ。考えるが、わからない。どうやってここまで来たんだっけか。

(『さや』 p.12)

(17) 電車で来たんですよ。支線に乗り換えて。乗換駅は海辺の駅でした。メザキさんに教えてあげた。(『さや』 p.13)

(16)と(17)の場合、波線部分と点線部分は、文中あるいは周辺テキストにおける人称標識によって、作中人物の「私」と「メザキさん」による発話であることが明らかであろう。このように広範囲の周辺テキストを考慮して、(17)の返事と思われる(13)は、「メザキさん」による発話であると判断することができる。

3. 3 発話の順番を示す

複数の作中人物による会話は、通例、発話された時間的な前後の順番で再現されるが、次のように、発話の順番通りに再現されていない会話例も存在する。

(18) ①ねえメザキさん。さっきにしたかおぼえてる。ふたたび歩きはじめていた。②寒いから、歩きましょう。メザキさんは言って立ち上がったのだ。降るようだった蛙の声が減っていた。道はあいかわらず同じ幅で、電信柱が片側にぼつりとあらわれては遠ざかった。③なにかしました、ほく。メザキさんは目をこすりながら聞いた。(『さや』 pp.19-20)

①は作中人物の「サクラ」による発話であり、②と③は「メザキ」による発話である。いずれも自由直接話法で再現されている。この3文の周辺テキストの意味から読み取れるように、「歩く」という動作は「立ち上がる」という動作の後に行われたはずなので、①は②より後に発せられた発話である。つまり、(18)における発話の順番は②→①→③である。

次は、(18)における問題の3文の順番を変えずに、周辺テキストを少し変更した作例である。

(19) ①ねえメザキさん。さっきにしたかおぼえてる。座ったままメザキさんに聞いてみた。②寒いから、歩きましょう。メザキさんはそう言って立ち上がった。③なにかしました、ほく。メザキさんは目をこすりながら聞いた。

周辺テキストをこのように変えると、発話の順番は①→②→③になる。ここで発話の順番を示しているのは、発話の再現部分そのものではなく、明らかにその周辺テキストである。

3. 4 思考・発話部分の範囲を示す

自由直接話法または自由間接話法で再現された作中人物の思考・発話は、地の文に溶け込んでいるため、周辺テキストの意味を考慮しなければ、その範囲を確定できない。このことを論じるために、まず次の例を挙げる。

②①ちえ子は一族に取り囲まれた話し合いの場面を想像した。②自分はたったひとり、正義を主張することすらもできないだろう。③何ひとつ悪いことはしていないのに、理不尽だとちえ子は思った。④たとえば遠縁の誰かひとりでもいい。自分の正義を代弁してくれる人間がいたならば、仮に結果は同じになろうともどれほど心強いことだろう。

⑤風が凪いで、迎え火の煙が庭先にわだかまった。⑥目を刺されたふうをして、ちえ子はハンカチで瞼を押さえた。⑦泣き顔を見られたら負けだ。⑧呻き声を奥歯で噛み殺すと、腰が摧けた。(『うら』 p.220)

この例の場合、点線部分が作中人物の「ちえ子」の思考内容として読み取れるのは、そこに作中人物に帰属するモダリティ表現が用いられているからである。しかし、思考内容の範囲が点線部分でよいかどうかは、周辺テキストを見て判断しなければならない。①には「ちえ子」の内面に移入していく標識として「想像した」が用いられているが、①自体は作中人物の内面ではない。③は「ちえ子」の思考を伝達する部分であるが、「……とちえ子は思った」という語り手による伝達部が存在するため、直接話法または間接話法になっている。⑤は周囲の様子、⑥と⑧は「ちえ子」の行動についての描写であるので、語りになっている。このように、周辺テキストが語り手によって語られたテキストであるため、点線部分が自由間接話法による思考再現の部分と見なしうる。

しかし、とらえ方によっては、思考内容の範囲についての判断が揺れることもある。メイナード(1997:149-150)は、「と」引用の場合には「こと」、「ということ」を使用する場合とは違って、導く節が従属節にならないうえ、「と」の及ぼす勢力範囲が文を超えると述べている。これはつまり、「と」が複数の文をその勢力下において、それらを一つの談話の断片にまとめる役目を果たするという考えである。この考えにしたがえば、③の思考内容と意味的に一つのまとまりをなしている点線部分の②と④は、③における伝達部に導かれる直接話法または間接話法の一部としてとらえることも可能である。このように見なすと、自由直接話法と自由間接話法による作中人物の思考再現として解釈されるのは、⑦の1文のみになる。

ただし、一続きの思考表出であっても、その途中から「と」の勢力範囲から逸脱し、当該部分が自由直接話法または自由間接話法として読み取れる例も存在する。このことを、次の②で確認してみよう。

②①小雨の降りしきる日、ベルの音を聞いたココが、ドアを開けると、そこには、びしょ濡れの白人の女が、うすら笑いを浮かべて立っていた。女は、同じように濡れて、仔猫のような小さな男の子を連れていた。物売りだ、と、ココは咄嗟に思った。けれど、アパートメントの入口には鍵が付いて

いる筈だ。それを外して、入って来る物売りなど、いる筈がない。 (『トラ』 p.8)

この例では、点線の部分において、急に見知らぬ女性と男の子の訪問を受けた作中人物「ココ」の内面が表現されている。メイナード(1997)の主張にしたがえば、点線の部分全体が「と、ココは咄嗟に思った」という伝達部に導かれた被伝達部になる。しかしここでは、伝達部に「咄嗟に」という副詞節が用いられている。この表現から、「物売りだ」というところまでが被伝達部だということになる。なぜなら、伝達部に後続する部分は「咄嗟に思った」ことではなく、論理的に考えている内容だからである。

このように、自由直接話法または自由間接話法で再現された思考・発話部分の範囲を確定するときには、周辺テキストの意味を考慮しなければならない。周辺テキストについてのとらえ方によっては、思考・発話部分の範囲の判定が揺れることもある。

3. 5 曖昧な場合

以上見てきたように、周辺テキストには、自由直接話法と自由間接話法で伝達された思考・発話の再現部分をより正確に理解するための情報が多く含まれている。しかし、それにもかかわらず、周辺テキストを考慮してもなお曖昧な場合がある。それは、たとえば次のような場合である。

②なぜ移転届けを出すために私たちがつきあわなければいけないのかと妹を詰問しながらも、私は行くしかないと観念していたのだが、それでも妹とだったらら会話をつづけた。問題は一緒に棲むつもりはないということをどうやって父に納得させるかだ。(『フル』 p.9)

虽然我责问妹妹：交迁居报告，为何非要我俩陪着去呢？！但最终还是决定去一趟。我和妹妹谁都不愿意和父亲住在一起。围绕如何说服父亲这件事，我俩在电话里谈了很长时间。(p.3)

②の場合、「会話をつづけた」という部分に注目すれば、点線の部分は作中人物の「私」と「妹」が電話で話した会話の要旨としてとらえられるであろう。現に中国語訳においては、この部分が会話の内容として翻訳されている。またこの部分は、父が移転届けを出すのに付き合わなければならないと観念しながら思念する作中人物の「私」の内面としても読み取れる。②に後続する部分は、翌日の出来事について語り始めた部分なので、点線部分が思考表出と発話再現のいずれになるかという判別には役立たない。このように周辺テキストを考慮しても曖昧さが残るような場合、その部分についての理解は読み手の判断に委ねられることになる。

4. おわりに

本稿では、自由直接話法と自由間接話法の周辺テキストに焦点を当てて、その種類や話法の前後における出現頻度、そして話法の理解における役割について考察した。本稿で明らかになったことは、次のようにまとめられる。

作中人物の思考・発話の再現部分の周辺テキストは、知覚に関する表現、内面に関する表現、思考主・発話主の行動に関する表現、その他の表現とに分類できる。いずれの表現も思考・発話の再現部分の前と後に現れるが、その出現頻度に差が見られる。思考再現の場合、その前に多く用いられる思考主の知覚に関する表現と内面に関する表現が思考主の内面への移入をスムーズにさせている。後のテキストにおいて思考主の行動に関する表現が増加するが、これは思考主が思考を経てから実行に移すというパターンが小説に多く見られるからであろう。一方、発話再現の場合、その周辺には、発話主以外の作中人物の発話や当該部分が発話であることを示す表現が多く用いられている。

周辺テキストの役割には、自由直接話法と自由間接話法のテキストが思考表出と発話再現のいずれであるかを示す役割、思考主・発話主がいずれの作中人物であるかを示す役割、自由直接話法の形式でなされた会話の発話の順番を示す役割、そして思考・発話の再現部分の範囲を示す役割がある。このように周辺テキストは、自由直接話法と自由間接話法を理解するうえで重要な役割を果たしているため、周辺テキストを考慮しないで自由直接話法と自由間接話法を正確に解釈することは不可能であろう。

注

- 1 先行研究を紹介する場合、専門用語の使用は原文にしたがう。ドイツ語で「体験話法 (erlebte Rede)」と呼ばれるものは、本稿で言う「自由間接話法」に当たる。
- 2 従来の研究では自由間接話法のみについての議論が多いが、本稿では自由直接話法と自由間接話法の両方を同時に取り上げる。こうするのは、日本語においては、自由直接話法と自由間接話法とが必ずしも明確に区別できない場合があるからである。
- 3 思考・発話の内容を伝える部分が完全に作中人物によるものであれば、その部分は自由直接話法になる。一方、作中人物のテキストと語り手のテク

ストが融合していれば、当該部分は自由間接話法になる。

- 4 表1において、※印で長編小説を示した。
- 5 本稿は自由直接話法と自由間接話法の周辺テキストを考察対象としているので、作中人物の思考・発話の再現部分がいずれの話法になるかの分析は特にしなない。

参考文献

- 鎌田 修 (2000) 『日本語の引用』 ひつじ書房
- 川島淳夫 (1975) 「体験話法と (コン) テキスト」 『北海道大学文学部紀要』 36
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——』 ひつじ書房
- 顧 那 (2003) 「自由直接話法と自由間接話法に関する日中比較研究——三人称童話を分析対象として——」 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻修士学位論文
- 野村眞木夫 (2000) 『日本語のテキスト——関係・効果・様相——』 ひつじ書房
- 保坂宗重 (1981) 「日本語における体験話法——西欧語の体験話法との比較において——」 『茨城大学教養部紀要』 第13号
- 保坂宗重・鈴木康志 (1993) 『体験話法 (自由間接話法) 文献一覧——わが国における体験話法研究——』 茨城大学教養部
- メイナード, 泉子・K (1997) 『談話分析の可能性——理論・方法・日本語の表現性——』 くろしお出版

例文出典

- 『発見』: 『発見者』 辻井喬, 『桃幻記』 より, 集英社, 2003
- 『透光』: 『透光の樹』 高樹のぶ子, 文芸春秋, 1999
- 『鉄道』: 『鉄道員』 浅田次郎, 『鉄道員』 より, 集英社文庫, 2000
- 『うら』: 『うらぼんえ』 浅田次郎, 『鉄道員』 より, 集英社文庫, 2000
- 『宵の』: 『宵の春』 中沢けい, 『さくらささくれ』 より, 講談社, 1999
- 『イン』: 『インストール』 綿矢りさ, 河出書房新社, 2001
- 『伽羅』: 『伽羅』 浅田次郎, 『鉄道員』 より, 集英社文庫, 2000
- 『さや』: 『さやさや』 川上弘美, 『溺れる』 より, 文芸春秋, 1999
- 『刺繍』: 『刺繍する少女』 小川洋子, 『刺繍する少女』 より, 角川書店, 1996
- 『晩年』: 『晩年の子供』 山田詠美, 『晩年の子供』 より, 講談社, 1991

『トラ』：『トラッシュ』山田詠美、文芸春秋、1991

『フル』：『フルハウス』柳美里、『フルハウス』より、文芸春秋、1996

（《客满新居》许金龙訳、《女学生之友》より、中国文联出版社、2001）